

「戦争と平和！」
第 17 回

上海でコワイ思いをした

河登 一郎



私は、昭和 10 年生れ現在 84 歳です。昭和 20 年 8 月 15 日の終戦日には、国民学校 4 年生でした。

当時は、父の仕事の関係で上海に住んでいました。そのころの上海には日本人が多く住んでいて、(兵隊を除いても)

約 10 万人いると云われていました。日本人だけの小学校が 9 校もあり、私が通っていたのは 7 番目にできた「第七日本国民学校」。今でも当時の同窓会を年に 1 回開いています。教科書は内地と全く同じ「文部省検定教科書」を使っていました。強いていえば「副読本」と称して、中国の古典を子供向けに書いたものを使っていたことでしょうか。



1920 年の上海、九江路
インターネットより入手

上海は中国の都市ですから、アメリカの空爆は殆どありませんでした。空襲警報が鳴って庭に掘った防空壕に入った記憶はあ

りますが、被爆の経験はありません。当時の上海は帝国陸軍及び陸戦隊が治安を維持していたので、戦時中も在留邦人が「コワイ思い」をした経験は殆どありませんでした。

唯一、コワイ思いをしたのは、終戦後間もないある日、私たちが住んでいた郊外の日本人集落を数千人もの中国人が襲ってきたことです。「襲った」とは云っても、道路を埋め尽くしただけで家の中に入り込む等の狼藉はありませんでした。その団地の一角に日本軍の隠匿物資があり、それを狙ってきたらしい。ところが、我が家のお向かいが軍属のお宅で、ご主人は出征してご不在、若い奥さんと子供だけが住んでおり、中国人たちがそこに入ったように見えたの

で、父が(今までの調子で)「その家に入るな」と怒鳴って止めに行ったところ、道にあふれるほどいた中国人が何人も父に殴りかかってきたことがあります。母が必死になって「あなた、家に入って」と云って引き入れ、私たちも固唾を呑んでいました。中国人たちは、その後我が家の 2 階の窓に石を投げてガラスを割ったりはしましたが、乱入したりすることはなく、間もなく中国の警察官がきて群衆を追い払ってくれました。

上海は、終戦後アメリカ軍がすぐに入ってきたことも(ソ連軍が入ってきた満州と異なり)治安が比較的良かった原因だったと思います。上海で私たちがコワイ思いをしたのはこのときだけです。後は引き揚げ時に「自分たちが持てるだけ」しか荷物を持って帰れなかったこと、帰国した博多で DDT を頭からかけられたこと、雑穀で作ったまずいおにぎりが配給されたこと、帰国先の父の出身地(山口県岩国市玖珂)では農業をしていた叔父の家族がおいしいタケノコご飯を作ってくれたことなど、思い出は尽きません。

同じ中国でも奥地(武漢・南京など)や満州・朝鮮にいた日本人は、筆舌に尽くしがたい苦労をされたと聞いています。現代の「戦争」は総力戦になりますから、軍人や兵隊だけでなく、一般の国民も巻き込んで大勢の国民を殺し、経済的にも塗炭の苦しみを強いることになります。戦争は絶対にしてはいけません。とは云っても、国と国の間にはどうしても意見の合わないこともあります。しかし、その場合でも戦争による解決でなく「外交」によって解決せねばならず、そのために「国連」ができたのですが、限られた国が「拒否権」を持っていたり、一部の国の軍事力が強かったり、国連決議に従わないことなどもあって、「公正な」裁きが実現するとは限りません。その結果、現在の世界には全人類を 100 回も殺せるだけの核兵器が存在するという「恐怖の均衡」の下に存在しているのです。

日本は、唯一の核被爆国なので、率先して核兵器廃絶を含む軍縮で世界をリードすべきです。トランプに言われるままアメリカの軍備を爆買いするなど、日本人としてとるべき政策ではありません。